リアルバウトハイスクールin川神

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リアルバウトハイスクールｉｎ川神

【Ｎコード】
Ｎ３２５７ＢＡ

【作者名】
反省猫

【あらすじ】
川神学園に２人の少年がやってきた。その少年たちが川神学園に新たな風を
運んでくる事をまだ誰も知らない…
※この小説は、真剣で私に恋しなさい！×リアルバウトハイスクールのクロスオーバー作品です。キャラ崩壊・残酷な描写苦手な方は、読まない事をおススメします。それでいいよという方だけお読みください。

第０話　『やってきた男たち』（前書き）

勢いとあふれだした欲望のまま書いてしまった……。
でも後悔はしてないｗ

第０話　『やってきた男たち』

？？

「…ここか。川神学園と言うのは」

川神学園の校門前にある少年が立っていた。

少年の容姿は、面長で鼻筋のすっきり通った、どちらかと言えば中性的な感じがする美少年。

しかし、何年もかけて焼いたような赤銅色の肌のせいで野性的で精悍な印象が強い。

髪型は伸びたボブカットで髪の色は黒。また、眼光は鋭く、そうだな～、

例えて言えば“武士”　そういう雰囲気を纏った１５歳の少年である。

？？

「…そうだ。そして今日から俺たちの学び舎となる」

褐色肌の少年の隣りには、別の少年が同じく川神学園を見上げている。

その少年の容姿は、ふち無し眼鏡に整った髪形の優等生といったイメージの

美少年だった。

??

「とりあえず、ここにいても仕方ない、中に入るか…」

??

「そうだな」

そして二人は歩き始める。

褐色肌の少年の名前は、草？（くさなぎ）　涼馬（りょうま）。

ふち無し眼鏡の少年の名前は、氷室（ひむろ）　冬至（とうじ）。

この二人が川神学園に新たな風を運んでくることをまだ誰も知らない……

＜続く＞

第０話　『やってきた男たち』（後書き）

作者「という事で、始まりました【リアルバウトハイスクールｉｎ川神】」

作者「元々、リアルバウトハイスクールが大好きでよく読んでたのですが、
　よく考えたら、この設定で真剣恋いけんじゃね？と思いまして
　今回、欲望のまま見切り発車してしまいました」

作者「という事でこの小説は真剣恋の世界を舞台にこの二人が、風間ファミリーや
　その周辺を巻き込みドタバタをやるアクションファンタジーものです」

作者「真剣代のときよりＲ１５要素多めで行きたいと思います。またキャラもまた崩壊すると思うので
　ご了承を」

作者「また今回は、主人公である涼馬と冬至は、現段階で最強ではありません。
　修行をして最終的に最強となります。なので普通に怪我もしますし、当たりどころ悪ければ
　死にます」

作者「まぁ、相変わらずの駄文ですが、暇つぶしに読んでくれるなら幸いです」

作者「次回は、２人のキャラ設定を書こうと思います」

作者「また感想ありましたら送ってくれると励みになりますが、カミソリレター的なものは
ノーサンキューという事で、結構凹みやすい人なんで（ー｜ー；）」

作者「という事で、3日に1度更新ですが、よろしくお願いします」

オリキャラ設定その１（前書き）

オリキャラ２人の設定です。それではどうぞ～

オリキャラ設定その１

オリジナルキャラクターその？

名前：草？　涼馬
ｃｖイメージ：岡本　信彦（『とある魔術の禁書目録』（一方通行（アクセラレータ）役））
身長：１８０ｃｍ
体重：６９ｋｇ
性格：真面目だが、ぶっきらぼう。細かい事は気にしない。
　大切な者に危害が及ぶと静かにキレる。
趣味：音楽　楽器演奏　料理などの家事
好きな物：和食
嫌いな物：チンピラ　外道　母親の料理
武器：仙術気功闘法【神威の拳】・飛天流
容姿：赤銅色の肌と整った面長で鼻筋のすっきり通った、中性的な感じ顔。
　目は母親似の鋭い眼光。髪型は黒髪の伸びたボブカット。細マッチョ系。

川神学園１年Ｃ組の生徒。幼い頃より東方　流玄に神威の拳を鬼塚鉄斎から飛天流を習う。
通常一個人に一種類しか持たない神威の神気を、
「天」「月」「炎」「雷」の４種類を持つ。
元々は東京に住んでいたが、鉄心に呼ばれ、川神市に来ることになった。
趣味の音楽と楽器演奏は父親の影響。料理や家事は、母親が壊滅的な為、
仕方なくやってたのだが、やってるうちに趣味とかし今に至る。

名前：氷室　冬至
ＣＶイメージ：羽多野　渉（『乃木坂春香の秘密』（綾瀬　裕人役）
）
身長：１７５ｃｍ
体重：６０ｋｇ
性格：沈着冷静で頭脳明晰。クールな感じがするが誰にでも優しく
基本いい人だが、
　外道や卑劣漢な輩には非情になる。
趣味：読書　鍛錬　説教
好きな物：麺類　豆乳
嫌いな物：チンピラ　外道　虫
武器：骨法・仙術気功闘法【神威の拳】
容姿：ふち無し眼鏡に黒髪の整った髪形（黒髪ナチュラルショート）
　細マッチョ系。顔は、中性的な感じで真剣恋で言えば京極系
な感じ。

涼馬と同じく川神学園１年Ｃ組の生徒。涼馬とは生まれた時からの
幼馴染。親友にしてライバル。
幼い頃より東方　流玄に神威の拳を毒島　天堂により骨法を習う。
涼馬と同じく複数の神威の神気、「地」「風」「水」「山」の４種
類を持つ。
涼馬が、鉄心に呼ばれた際に涼馬のおさえ役兼お目付け役として川
神にやってきた。
成績は悪くなくＳ組でもやっていける実力が、涼馬とつるむほうが
面白い為Ｆ組になった。
本来ならＳ組の面々に目の敵にされる所だが、元来の性格により恨
まれることもなく
現在に至る。元々鍛えるのが好きな為、それがこうじて色々な鍛錬
法を作っては試している。

オリキャラ設定その１（後書き）

作者「オリキャラ設定は今後も新キャラ出てき次第、設定を投稿しようと思ってます」

作者「次回から、本格的に真剣恋のメンバーがでてきますのでお楽しみ～。

では、また次回お会いしましょう～」

第1話　『なんの脈絡もなく好きと言われたがさてどうしたものか』（前書き）

今回は、涼馬たちと京、大和などの主要人物たちとの出会いの回です。
それではどうぞ！

第1話　『なんの脈絡もなく好きと言われたがさてどうしたものか』

涼馬
「ふあぁ～～。眠い…」

眠そうに目をこする涼馬が呟くと隣の席の京が珍しく話しかけてくる。

京
「いつもより眠そうだね。なんかあったの？」

京が小説を読みながら横目で涼馬の顔を見ると、涼馬の顔が嫌気が指したような表情に変わる。

涼馬
「昨日、寝ようとしたら…うちのクソ親父が電話してきてな。深夜の2時までしゃべってた…」

それを聞いて一瞬呆れた表情を取る京が、

京
「…はぁ～。涼馬は律儀だね。そんなに嫌ならすぐ電話切ればいいのに…」

京のその言葉に涼馬もため息をつき、

涼馬
「はぁ～～、俺もそう思って15回くらい電話切ったさ」

それを聞いて、京はクスリと笑い、

京

「それはご愁傷様。お互い面倒な親を持つと大変だね…」

涼馬

「あぁ、まったくだ」

涼馬は京の言葉に同意するのだった。

それにしてもなぜあの極度の人見知りの京が、出会って間もないこの少年とこういう会話をしているのか

というと、自己紹介のときに遡る。

――――回想

涼馬

「草？　涼馬だ。趣味は音楽鑑賞と楽器演奏だ。一年よろしく頼む」

そう言って、涼馬は簡単に自己紹介をし席に座った。

涼馬の後何人か自己紹介を終え、次の人の番をなった。

大和

「直江　大和。趣味は読書、音楽鑑賞など色々。みんなこれから一年よろしくお願いします」

そう元気良く挨拶するが、涼馬と冬至には、どうもネコ被ってるようにしか見えない違和感が

してならなかった。

それからまた何人か自己紹介が終わると冬至の番になった。

冬至

「氷室　冬至です。趣味は読書。これから一年よろしくお願いします」

冬至がにこやかにそう自己紹介すると一部の女子からキャーキャー言い出す。

ビシッ！！

鞭の音がし、クラス全員ビクッとなり、その音を立てた担任の小島梅子教諭が

梅子

「静かにせんか！　バカ者が！」

と怒鳴った。

続いて、男子が終わり、女子の自己紹介の番となった。

自己紹介は順調に進んでいき、ある少女の番となる。

京

「…椎名　京。以上」

そう言って、席についた。

それを見て周りがヒソヒソし出す。

女子生徒Ａ
「あれが…」

男子生徒Ｂ
「親があの…」

涼馬は周りのヒソヒソ話を聞き、「はぁ～～」とため息をつき、

机を蹴っ飛ばす。

ドン！！

一瞬何が起こったのかわからないといった京を含むクラスメイトだったが、

涼馬が怒気を含んだ低い声でクラス全員に

涼馬
「ヒソヒソ話してんじゃね！　俺は裏でコソコソ陰口を叩いてるやつらが
　物凄く嫌いでな、…おい、そこのお前、今何こそこそ話してた…」

男子生徒Ｂ
「…え？　それは…」

涼馬
「な　ん　て　い　っ　た　？」

凄みのあり迫力のある表情をした涼馬に睨まれた男子生徒Ｂは、

男子生徒Ｂ
「ひぃぃぃ！！！　椎名さんの母親が淫売だって噂があって！」

涼馬は、それを聞いた瞬間、人も殺せそうな眼差しをしながらクラスメイト達と見て、

涼馬
「それが、椎名自身に関係あるのか？　親は関係ないだろう。……なぁ？　そうだろう（怒）」

静かに怒る涼馬の雰囲気にクラスメイト全員が飲まれ、無言でコクコクと頷いた。

この日からこのクラスにあるルールが一つ追加された。

【草？　涼馬を怒らすべからず】というルールが……。

ビシッ！！

梅子
「やりすぎだ！　しかし、その行為は褒めてやる。皆もわかった思うがこれから一年やっていく
　クラスメイトの一人だ。そういう陰口を叩く行為や陰湿ないじめをする輩には、
　私や学長自ら指導をしてやるのでそのつもりに！」

クラスメイト

「はい！」

こうして京に対するクラスメイトの態度はかなり柔らかくなったが、京自身が人との壁を作っているので、

なかなかクラスに馴染む事が難しかった。

まぁ、その事件以降、数は少ないが俺に対して京が話しかけてくるようになった。

それが縁で、幼い頃より一緒だという直江　大和とも知り合いになり、友人となった。

大和と京は【風間ファミリー】という幼馴染のやつらとよくつるんでいる。

京の人見知りもそのせいもありなかなか直らないというのが、大和の話でわかった。

京は大和が好きらしくよくアプローチしているが、大和がそれをすげなく交わし断り続けている。

俺は不思議に思い、大和に理由を訊ねるとこう答えが返ってきた。

大和

「…俺には京に好かれる資格なんてないんだよ」

それから大和から京と過去の出来事を聞いた。

昔、京は虐められていた。

原因は京の母親。無類の男好きのせいでかなり数の男と関係を持ってたらしく、
その噂を聞いたまわりの人たちから淫売などと罵られ、その子供である京にも
淫売の娘という烙印を押し付け、イジメの標的にされていたらしい。
イジメの内容は物凄く陰湿なものだった。
京の机には陰湿ならくがきで埋め尽くされ、体操服はゴミ箱に捨てられるか隠され、
挙句には当時生き物係だった京が大切にしていた世話をしていた川の魚を
クラスメイトの女子たちが、魚を殺しそれを京のせいにして罵声を浴びせたという。
それを聞いた俺は、どうしようもない怒りに打ち震えた。
しかし、そんなイジメを受けようとも京は、ひたすら我慢して耐えていたという。
それを聞いて俺は京の事を「なんて心の強い女の子だろう」と思い、ある種の尊敬を覚えた。
大和
「俺は最初京のいじめに気付いてたのに無視してたんだ。京が苦し

んでいるのに気づいていたのに…。
助けたら、俺や俺の仲間が次の標的にされるのが怖かった」
大和が辛そうな表情でそう言うと涼馬は、
涼馬
「でも椎名を救った。違うか？」
涼馬の言葉に大和の目から涙が溢れ、
大和
「…違う！　救われたのは俺のほうだ！　京を救った理由は、
そんな自分が嫌で、京を助けたのも罪滅ぼしだ！」
涼馬
「でも、理由がどうあれ、椎名を救ったのはお前だ！
その事実は変わらない…」
涼馬のその言葉を聞き、
ある意味懺悔に近い言葉をずっと今日の今日まで言えず苦しんできた大和にとって、
涼馬の言葉は今で全て抱え込んでいた物を全て許されたようなそんな気がした。
大和
「ありがとう、その言葉でおれはもう…」
大和の涙はそれから数分後、止まることはなかった。

――――――京　ｓｉｄｅ

私は最近、気になる人が一人増えた。

その人の名前は、草？　涼馬。

私と同じクラスのクラスメイトだ。

自己紹介の時、周りからヒソヒソ声がし、またかとある種のあきらめた感じがあった私だったが、

一人の男子が、私の代わりにクラスメイト全員にこう言い放った。

涼馬

「それが、椎名自身に関係あるのか？　親は関係ないだろう。」

と。

大和たち意外で始めて私を私と見てくれた男子。

私はこの草？　涼馬に興味を抱いた。

涼馬の家は、父親は有名なピアニストだが、かなりの放浪癖があり、

家に帰ってくることがあんまりないという。

帰ってきたら帰ってきたでやかましく騒がしいそうだ。

それを聞いて、理由が違えど親に苦労させられているという点で、

大和たち以外でよく話をするようになった。
軽い世間話や本の話をなど結構話していると楽しかった。
そして気づいた……。
私、この人に惹かれ始めていると…。
たしかに大和が好きだ。
返しきれない恩もある。
しかし、大和を思う気持ちと同じいやそれ以上の気持ちが私の中で育ち始めている。
そしてその気持ちに完全に気づいた出来事が、あれだ。
大和を探しに屋上に向かうと大和と涼馬が話しているのが聞こえた。
私は気付かれないよう気を付け、気配を消し、話を聞いた。
どうやら私と大和の昔の出来事を大和が話しているようだ。
大和
「…違う！　救われたのは俺のほうだ！　京を救った理由は、
　そんな自分が嫌で、京を助けたのも罪滅ぼしだ！」
大和のその言葉を聞いてそうなんだと思ったというより気づいていた。

大和にあれだけ熱烈なアプローチをしているのに受け入れてくれないのは、

何か理由があると思っていたけれど、大和は私に対して負い目を感じてたなんて…

少なからずショックだった。

涼馬

「でも、理由がどうあれ、椎名を救ったのはお前だ！

その事実は変わらない…」

そんな大和の言葉を聞いた涼馬が、大和に対してそう言った事に私は驚いた。

同情？　違う、あれは本心でいっている目だ。

涼馬の表情は嘘偽りない真剣なものだった。

私を私としてみてくれる人そして私の大事な人の長年の苦しみを開放してくれた人。

京

「草？　涼馬」

その名前を言った瞬間、私の心の中が暖かくなった。

今なら言える。

椎名　京は、草？　涼馬に“恋”してると。

――――――side　out

そして時間が最初に戻り、

京

「涼馬」

京が読んでいた小説を机に置き、潤んだ瞳で涼馬を見ながら、

涼馬

「…なんだ？」

京

「好き、そして付き合おう！」

涼馬

「却下。お友達で」

涼しい顔をして涼馬は京の告白をさらりと断った。

京

「振られた…でも、諦めない！」

振られてもめげない京を見て涼馬は、困った表情をして、

涼馬

「…どうして、こうなった」

それを見ていた大和と冬至はヤレヤレとポーズを取ったのだった。

＜

続く＞

第1話　『なんの脈絡もなく好きと言われたがさてどうしたものか』（後書き）

作者「とりあえず、京が大和ＬＯＶＥだった為一番難攻不落だと思ったのであえて一番最初に
　涼馬に絡ませようと思いましたが、書いていていつの間にか涼馬ＬＯＶＥに…」

「大和もあの一件があり、涼馬なら京を任せられると思い、自ら身を引いたという裏設定があります」

「それにしても今回も何人に女の子が、オリ主に惚れるのやら……」

「しかし、今回は、ハーレムは考えておりません。後で投票してもらってから
　メインヒロイン決めたいと思います」

「そしてこの話の流れでお気づきと思いますが、原作の１年前からスタートしてますので、
　クリスとまゆっちは当分出てきません！　クリス・まゆっちファンの方ごめんなさい（汗）」

「次回から戦闘シーンがちょこちょこ入ると思います。お楽しみに～
　では、次回までさよなら～～～」

第2話　『とりあえず、かかってこい！』（前書き）

京・大和に続いてあの人たちがでてきます。ヒントは戦闘狂。自由人。犬。筋肉。影薄い。……バレバレですねw

第2話　『とりあえず、かかってこい！』

ガラガラガラ！！！

いきなり教室のドアが開いた。

？？

「ここに草？　涼馬というやつはいるか？」

そう言ってきて入ってきたのは、長い黒髪に鋭い眼光のナイスバディな女子生徒だった。

雰囲気からして俺たちよりも1個上くらいか。

その女子生徒に気づいた大和が、

大和

「ね、姉さん！？　どうしたの一体？」

姉さん？

「おう、大和。ちょうどいい。草？　涼馬ってやつはどいつだ！」

大和から姉さんと呼ばれた上級生が大和にそう訊ねると

大和

「涼馬ならあそこに…」

そう言って、涼馬がいる席を指差す。

涼馬
「ん？」
そして上級生が、涼馬の所まで来ると品定めをするようにじっくりと涼馬を見た。
涼馬
「…なんか用か。先輩？」
とりあえず、上級生のようなので先輩と呼ぶことにした涼馬。
姉さん？
「…ほう。なかなか面白い気を持っているな。お前とそこにいるお前」
そう言って、涼馬と冬至を指差した。
涼馬
「…あんた誰だ？」
涼馬は鋭い目付きでその上級生を睨むと上級生は口元に笑みを浮かべ、
姉さん？
「私の名前は川神　百代だ。お前がじじいが呼んだやつか」
涼馬
「（こいつが川神　百代か。なるほどかなりの強い気を持っているな。しかし、かなりムラがあるな）
　ああ、そうだ。俺が草？　静馬だ」

涼馬が肯定すると百代は目を細め獰猛な笑みを浮かべた。

百代
「涼馬。私と戦え！」

百代がそう言うと、

？？
「ちょっと待てい、百代」

教室の入口のほうから声がする。

声の主は、この川神学園の学長兼世界最高峰の武術の総本山川神院総代【武神】川神　鉄心だった。

百代
「邪魔するな、じじい！」

鉄心
「アホタレ！　この学園でお前たちが戦えば学園が壊れるわい。
試合は、放課後すぐに川神院第１試合場で執り行う。それでよいな百代」

鉄心からそう言われると百代は渋々といった感じで舌打ちし

百代
「チッ！　…仕方ない。わかった」

鉄心

「涼馬もそれで良いかのう？」

鉄心が涼馬に確認すると

涼馬

「問題ない。承知した」

こうして、百代ＶＳ涼馬の試合が決定したのだった。

そして放課後、

涼馬は、冬至、京、大和と一緒に川神院へとやってきた。

すると門の前には、何人かの男女が立っていた。

？？

「お？　おーい、大和、京！」

赤いバンダナをした少年が、大和と京に声を掛けた。

大和

「キャップ、みんな。…キャップたちも試合を見に？」

大和がキャップと呼んだ少年に訊ねると

キャップ

「あぁ、そうだ。だって面白そうだろ！」

キャップが笑顔でそう言った。

??

「お、そいつらは誰だ?」

京

「モモ先輩の今日の試合相手の草? 涼馬。私の将来の旦那様♪」

涼馬

「…そんな事実はない」

涼馬が冷静に否定する。

京はそれに唇をとんがらせて

京

「チェー」

不満そうな声を上げる。

??

「へぇ〜、その人が大和から京を寝取った」

ひょろっとした影の薄い少年がそう言うと

??

「影薄くないよっ!」

相変わらずナイスツッコミb

??

「嬉しくない!」

影の薄い少年は無視して、

??

「?無視された!!」

涼馬が何とも言えない顔をし、

涼馬

「寝取ってもないし、そう言う事実はない」

と冷静に否定する。

??

「その人はわかったとして、その隣の人は?」

茶色いポニーテールをした少女が首をかしげてそう聞くと

冬至

「氷室　冬至です。涼馬の付き添いみたいなものです。よろしく」

（ニコッ）

微笑みながらそう言った。

キャップ

「なら、俺たちも自己紹介だぜ!　俺の名前は風間　翔一よろしくな!」

ガクト

「島津　岳人だ。京と大和のダチなら俺たちのダチだ、よろしくな

！」

ワン子
「川神　一子。よろしくね～！」

モロ
「師岡　卓也。よ、よろしく…」

キャップたちの自己紹介が終わると

涼馬
「改めて、草？　涼馬だ。よろしく頼む」

そういって頭を下げる。それを見ていたキャップが、

キャップ
「なんか武士って感じだな。お前面白いな！　気に入ったぜ！」

モロ
「たしかに武士って感じがしたね」

ガクト
「まぁ～、俺様ほどじゃないがな」

ワン子
「ガクトと比べる方が可哀想でしょう～、涼馬君が！」

ガクト
「そっちかよ！」

風間ファミリーの面々を見ていた涼馬と冬至は、

涼馬
「面白い奴らだな」

冬至
「そうだね」

二人がそう呟くと門の内側から

百代
「何そこでしゃべってるんだ？　早く試合始めよう！」

そう言いながら百代が出てきた。

涼馬
「…じゃ、行くか」

涼馬がそう言うと全員頷き、川神院の中に入った。

百代に案内され、立派な試合場にやってきた涼馬達。

鉄心
「おおう、来たか。ではじめるとしようかのう、両者中央にほれ」

百代と涼馬は、試合場中央で相手を正面に見て相対する。

鉄心
「それでは、東方！　川神　百代！」

百代
「ああ！」

鉄心
「西方！　草？　涼馬
！」

涼馬
「おう！」

鉄心
「それでは、（一呼吸置いて）はじめい！」

バシィィィィィン
！！！

試合の合図と同時に両者の拳がぶつかり合う。

ギリッ―　ギリッ―

百代
「ほう、少しは楽しめそうだ」

そう言うと百代は、一旦後方に下がり、

百代
「ハァァァ…！！！　川神流・致死蛍ぅ！！！」

百代の手のひらから無数の気弾が涼馬に向かって放たれる。

バシュー！　バシュー！　バシュー！　――――！

涼馬
「それなら、ふぅー」

涼馬は、特殊な呼吸法により、体内で気を練り上げ、「天」の神気を左手に集め、そして

涼馬
「神飛連弾！！」

無数のソフトボールくらいの気弾を生み出し、百代の致死蛍にそれをぶつけ、相殺していった。

百代
「そいつは囮だ！　左腕もらうぞ！　川神流・炙り肉！！」

いつの間にか涼馬に接近していた百代の右手が、人の温度じゃありえない程の熱量を帯びて

涼馬の左腕を持った。

百代
「貰った！　――――何っ！！」

しかし、涼馬の左腕も負けず劣らずかなりありえない熱量を持っていた為、炙り肉が効かない。

涼馬
「炎熱の篭手！」
涼馬は予め「炎」の神気を体内で練っておき、左腕にその神気を纏わせていた。

涼馬
「次はこっちから行くぞ！」
そう言って、百代が掴んでいる右手を払いのけ、拳を構え、

涼馬
「紅い牙！！」
ボクシングのアッパーカットをするような動作を取り、灼熱の衝撃波を出した。

百代
「くっ！！！」
涼馬の攻撃に百代は後方に引き下がらされた。

百代
「面白い、面白いぞ！　草？　涼馬！　久しぶりに本気で戦えるやつが現れた。
　さぁ、もっと楽しませてくれ！」
百代の顔は、自分と戦える者と出会えた事でかなり嬉しいのだろう。
満面の笑みでそう言った。

涼馬
「…俺は、あんたを楽しませる為に戦ってる訳じゃないが、……まぁいい」

そう言って、左手を返しクイクイと百代を挑発する。

百代
「ほう、そこで挑発か？　私も舐められたものだな！いいだろう、後で謝っても戦いを止めてやらんぞ！」

挑発されて相当頭にきたようだ。

涼馬はそれをみて不敵に笑い、一言こう言った。

涼馬
「さぁ、遊びの時間は終わりだ。…とりあえず、本気でかかってこい！」

＜続く＞

第2話　『とりあえず、かかってこい！』（後書き）

作者「という事で、この作品最初のバトルはもちろん百代戦からスタートです」

「作者は百代が大好きです。欲望に忠実なところとか…」

「次回で、百代との戦いに決着が付きます。お楽しみに～」

「それでは次回、またお会いしましょう、さよなら～」

第3話　『涼馬の実力』（前書き）

百代と涼馬の試合の決着が付きます。それではどうぞ～

第3話　『涼馬の実力』

百代
「川神流・星殺し！！」
百代は構えそして極太のエネルギー砲を涼馬に向けて発射する。
涼馬
「月の光（ボソッ）」
涼馬は小さくそう呟くと全身を「月」属性の神気で覆う。
バビューーーーーーーーン！！！
星殺しが涼馬直撃する。
京
「涼馬！！」
観客の風間ファミリーの面々は立ち上がるも冬至だけは普通に座っている。
百代
「ヤったか？　……何ィ！！」
星殺しが直撃したはずなのに涼馬は無傷でその場に立っている。
涼馬
「今のは危なかった！」

そう言ってニィと笑う。

百代は一瞬唖然とした顔になるもすぐに笑みを口元に浮かべ、

百代
「なら、これならどうだ！　川神流・無双正拳突き！！」

百代は一瞬で涼馬との間合いを詰め、強烈な正拳突きを放った。

それに涼馬は、百代の技を放つスピードの上のスピードで、その正拳突きを払い、

直撃を防ぎ、百代の腹に蹴りを一発打ち込んだ。

百代
「くっ…！」

その蹴りに百代は、自分がさっきまでいた後方に下がらされた。

涼馬
「これがあんたの本気か？　少々がっかりだ」

ブチッ！

百代から何かがキレた音がした。

百代
「殺す！　喰らえ、川神流・富士砕き！！」

先ほど放った無双正拳突きよりかなり強烈なパワーとスピードを誇る正拳突きを

繰り出し、涼馬がモロにそれを喰らってしまった。

涼馬
「ぐは！！」

涼馬は空中で仰向けになり、そのまま後方へ吹っ飛んでいく。

涼馬
「…ふ！」

涼馬は、空中で体勢を変え、試合場の床に着地し、

拳を構え、そして

涼馬
「さっきのは訂正しよう…今度は俺の番だ！」

そう言うと涼馬は、百代に突っ込んでいく。

しかし、百代は余裕な表情で涼馬が攻撃してくるのを待っている。

それに気づいた冬至が、

冬至
「涼馬！　それは罠だ！」

当時がそう叫ぶが既に涼馬は、百代に拳を突きだしている最中だっ

た。

百代
「遅い！　川神流・人間爆弾！」

百代は、自身を中心に爆発を起こし、その爆発に涼馬が巻き込まれる。

涼馬
「ぐっ！」

爆発に巻き込まれた涼馬は、思い切り試合場の壁に激突する。

ドゴォン！

百代
「はぁー　はぁー　これでどうだ！」

百代の全身は傷だらけで傷口から血が流れている。

百代
「はぁぁぁぁぁ！　…どういう事だ？　なぜ回復しない！」

普段なら百代のレアスキル『瞬間回復』で怪我を一瞬で回復できるのだが、なぜか傷が回復してない。

涼馬
「やはり、ヒュームのおっさんが言った通りか」

涼馬が壁から出てきて、そう言った。

百代
「お前…私に何をした？」
百代の質問に涼馬はこう答えた。
涼馬
「あんたの気を徐々に吸収させてもらった」
百代
「何だと！？　それも神威の拳の技か？」
涼馬
「あぁ、そしてこれで終わりだ――――――焔舞い！」
涼馬は体内に溜めた自分の気と百代から吸い取った気を融合させ、
神気として練り上げ、
その神気を爆発させ、両腕に圧縮した神気を滾らせて跳躍しまるで
鳳凰が飛び立つが如く
炎の翼を広げ舞い上がり、百代に向かっていき直撃させた。
百代
「うわぁぁぁぁぁぁ！！」
百代は、その衝撃に吹っ飛ばされ、百代は意識を失い、炎の翼により服が燃え、全裸になった。
涼馬

「やばい！」

涼馬は全裸になった百代を空中でキャッチし、

涼馬
「冬至！　俺の上着を！　京！　百代さんの替えの服を！」

冬至
「了解！　そらっ！」

冬至は指示通り、涼馬の制服の上着を涼馬に投げ、

京
「わかった！　ワン子、モモ先輩の服を」

ワン子
「わかったわ！」

そういうと京とワン子は替えの服を取りに行った。

涼馬は投げられた上着を見事にキャッチすると全裸の百代にそれを着せた。

こうして、涼馬の勝利で百代との試合は幕を閉じたのだった。

それから一時間後――――

意識を失っていた百代が目を覚ました。

百代
「ここは…私の部屋か」

ワン子
「お姉様！」

大和
「よかった、気がついたようだね」

百代の寝ている傍で心配そうな顔をしている風間ファミリーの面々がいた。

百代
「ああ…私は負けたんだな……」

百代が静かにそう言うと

大和
「それにしては、スッキリした顔をしているね。姉さん」

大和が優しい表情でそう言うと百代は目を瞑り、

百代

「ああ……」

満足そうな表情をし、そう言った。

キャップ
「それにしてもモモ先輩が負けるなんて涼馬のやつやるな～」

ガクト
「そうだな、尊敬に値するぜ！」

モロ
「うん、そうだね」

ワン子
「私も草？君と試合してみたくなったわ！」

ワン子がそう意気込む。

京
「流石は私の旦那様」

大和
「あ…ははは（汗）」

百代
「そういえば、涼馬達はどうしたんだ？」

大和
「なんでも、バイトの時間だとかで帰ったよ？」

百代
「…そうか。大和――」

大和
「ん？　なんだい、姉さん？」

百代は頬を赤く染め、

百代
「どうやら、私は涼馬に惚れたらしい」

ピシッ！

一瞬、周りの空気が固まった。

大和
「い…今、姉さんなんて言ったの？」

百代
「だから、涼馬に惚れた。歳の近い男の中であんな強い奴初めてだ」

風間ファミリー
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

百代の部屋で風間ファミリーの驚きの声が響くのであった。

一方、ピザ屋のバイト中の涼馬達は、

涼馬
「へっくっしゅん！！　ん？　風邪か？」

冬至
「誰かの噂かもしれないぞ？」

涼馬
「ないと思うぞ」

そんな会話をしながらせっせと注文のピザを作っていたのだった。

＜続く＞

第3話　『涼馬の実力』（後書き）

作者「涼馬ＶＳ百代の試合は、涼馬勝利で終わりましたが、
前にも言った通り、この作品は、本編の始まる1年前からスタートしてます。
なので、百代が本編の時より若干弱いです」

「そしてまた涼馬はフラグ立ててしまいましたね。一体何人、落とすのやら…
それとピザ屋のバイトですが、まだ15歳の為、キッチンスタッフです。
出前には行ってません」

「という事で次回は、あのヘタレ娘が登場します。お楽しみに〜」

第４話　『再会と三つ巴』（前書き）

ヘタレなあの娘の登場です。それではどうぞ～

第４話　『再会と三つ巴』

懐かしい夢を見た。

その夢は、苛められている女の子を助けた夢だった。

助けた女の子は綺麗な着物を着ていた。

女の子
「ヒク……ヒク……」

涼馬
「もう泣くな」

少年姿の涼馬がそう言うと女の子は半べそをかきながら上目遣いで

女の子
「ヒック…ヒック…だって……」

涼馬
「はぁ～～、どうすれば泣き止む？」

女の子
「撫でてたも…そうすれば此方は泣き止む」

涼馬
「わかった」

涼馬は泣いている女の子を要望を聞き、優しく頭を撫でた。

女の子
「あ…」

涼馬
「これでいいか？」

女の子
「うん……」

女の子がそう言った所で涼馬は目を覚ました。

涼馬
「なんか懐かしい夢を見たな。あの子は元気だろうか…」

涼馬は思い出していた。

涼馬とその子が出会ったのは、京都に両親と旅行に来ていた時だった。

ちょうど、親からはぐれ、宿泊していた旅館に向かってる途中で

複数の男の子に苛められている着物を着た女の子がいた。

涼馬は、その子を助けるためそのいじめっ子達を倒し、その女の子を助けたのだった。

涼馬
「――――とりあえず、学校に行く準備するか」

そう呟いて涼馬はベットから降りた。

学校に着くと廊下で誰かが良い争いをしていた。

近くに寄ってみると野次馬の中央に１－Ｆの男子と着物を着た女子が言い争いをしている。

着物を着た女子
「相変わらずＦ組は知能が低いのう」

猿顔の男子
「ムキィィィ！！　こいつ腹立つ！！」

どうやら女子のほうはＳ組らしい、なぜかＦ組とＳ組は仲が悪い。

なので、こいついざこざはよくあることだった。

涼馬
「はぁ～～、とりあえず、お前ら、廊下の中央でそんな言い争いされたら邪魔で仕方ない」

涼馬は野次馬にお構いなしに中央に入り、二人にそう言った。

猿顔の男子
「げっ…草？！」
着物を着た女子
「な！」
涼馬の顔を見た途端、猿顔の男子は驚いてビビった表情に変わり、
着物を着たS組女子は、涼馬の顔を見て驚いていた。
涼馬
「とりあえず、やるなとは言わないが、場所を考えろよおまえら」
猿顔の男子
「……あぁ……わかった」
そう伏し目がちでそう言うと
涼馬は自分のクラスへと行こうと二人に背を向けると
着物を着た女子
「待つのじゃ！」
涼馬
「ん？　何か用か？」
呼び止められた涼馬がその女子にそう訊ねると
着物を着た女子
「まさか……こんな所で会えるとは……会いたかったぞ涼馬～！！」

そう言って、涼馬に抱きついてきた。

野次馬
「何ィィィィィィ！！！！！」

いきなりその女子に抱きつかれた涼馬は、

涼馬
「お前、誰だ？」

と冷静に聞くと抱きついてきた女子の顔が真っ赤になる。

着物を着た女子
「忘れたのか！　涼馬！　此方じゃ、不死川　心じゃ！」

その名前に涼馬は一瞬驚き、

涼真
「心だと……本当に心なのか？」

心
「会いたかったぞ、涼馬♪」

まさかの再会だった。

それからチャイムが鳴り、一旦心と別れて、教室に向かうと
涼馬の隣の席の京の機嫌がかなり悪かった。
そして休み時間になった時、京がいきなり話しかけてきた。

京
「……あの女、誰？」

涼馬
「心の事か？　昔、両親と京都旅行した際に親とはぐれた俺が偶然、
複数の当時の俺と同じくらいガキが心を苛めている場面に遭遇してな、
俺が助けて京都いる間、一緒に遊んでいたんだ。
まさか、ここで会うとは思わなかったが……」

京は涼馬の話を聞いて思った。

京
「（またライバルが……なんとしても私に振り向いてもらわないと！）」

新しい恋のライバルの出現に京は決意を新たにするのだった。

涼馬
「ん？」

涼馬はそんな京を見て首を捻るのだった。

昼休みになり、涼馬が教室から出ようとすると

百代が、１－Ｃの教室にやってきた。

百代

「おお、涼馬。一緒にご飯食べないか？」

百代はファンクラブの女の子達からもらった大量の弁当を持ってきて、

涼馬を昼食に誘った。すると、

京

「モモ先輩すいません、涼馬は私と食べる約束が……」

百代

「むっ……！」

両者の目から火花が散るのが見える。

そんな中、

心

「おーい、涼馬、此方と一緒に昼餉でもどうじゃ？」

心がやってきて涼馬を昼食に誘う。

京

「むっ！」

百代
「むっ！」

心が涼馬を昼食に誘った瞬間、二人が心を睨む。

心
「なっ、なんじゃ！」

涼馬はその状況に溜息をつき、

涼馬
「とりあえず、みんなで昼食にしないか？」

そう提案するのだった。

それから冬至と大和も誘い、購買でパンをゲットした涼馬は学園の屋上へと向かった。

屋上に到着すると他の生徒が会話を楽しみながら昼食を取っていた。

涼馬は開いているスペースを見つけ、京がもってきたレジャーシートを敷くと

涼馬達は座り、昼食を開始した。

大和
「なんか居心地悪いような…」

冬至
「――――同じく。なんかピリピリしてないか、ここの空気」
それもそのはず、涼馬を囲んで女子たちが熾烈なバトルを繰り広げていた。

京
「これ、おいしいよ。涼馬、ア――――ン」
京は自分専用にカスタムした真っ赤な卵焼きを涼馬の口元近くへと持っていく。

涼馬
「京、それは俺には無理だ。どうみても食べちゃまずい感じがする」

京
「……おいしいのに」
京は残念そうにその真っ赤な卵焼きを食べた。

次に百代が

百代
「おい、涼馬、こっちの弁当おいしいぞ。食べてみるか？」
ファンからもらった弁当を涼馬に進める。

涼馬
「折角の申し出だが、それはモモさんの為に作られた弁当だ。

俺が食べて言いわけが無い」

そう言って断る。

百代

「……そうか」

涼馬に断られ落ち込む百代。

最後に心が、

心

「うちの専属の料理人が丹精をこめて作った弁当じゃ。食べてたもう、涼馬」

涼馬

「すまない、二人のやつを断わったのでそれは食べるわけにはいかない。

不公平なる」

そう言って涼馬は心のやつも断り、3人は全滅した。

それを見ていた大和と冬至はため息を着くのだった。

＜続く＞

第４話　『再会と三つ巴』（後書き）

作者「今回は短めです。涼馬は根が真面目なだけに京達は苦労しそうですね。
それと涼馬達ですが、当初１－Ｆにしてたんですが１－Ｃに変更しました。
理由は、涼馬達そこまで頭悪くないなと思いそうしました。
さて次回は、冬至がメインのお話です。お楽しみに～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3257ba/

リアルバウトハイスクールin川神

2012年1月14日22時47分発行